

万葉の地学

つきかたぶきぬ・その後

南 寿宏

本会会報第 54 号(2020/12/31 発行)において、柿本人麿の次の名歌を採り上げた。

東	野炎	立所見而	反見為者	月西渡	万葉集 巻一 48 柿本人麿
東の	野に炎の	立つ見えて	かへり見すれば	月傾きぬ	
ひむがしの	のにかぎろひの	たつみえて	かへりみすれば	つきかたぶきぬ	
東の野に朝の光がさしてきた。ふりかえって見れば、月が西の空に移っている。					

その際、最後に宿題を出したことを覚えている方は、おいでだろうか？

問題	人麿この歌群を詠んだのは、旧暦の何月何日か。5 首の内容から論ぜよ。
ヒント	玉かぎる 夕さり来れば み雪降る 安騎の大野に (万葉集 巻一 45) 黄葉の過ぎにし君が (万葉集 巻一 47)
解答・解説は次号で。	

何、覚えてない？そうですね、いちいち、覚えていられない。実は、不肖私も、すっかり忘れておまして、誠に申し訳ない次第であります。

最近、岩波新書から、万葉集に関する興味深い本が出版された。大谷雅夫著「万葉集に出会う (2021/8/20)」である。筆者の大谷氏は国文学者で京都大学名誉教授、古典文学大系や岩波文庫で万葉集を担当された方である。本書は、大谷氏が自身の研究の過程をエッセイ風に紹介したもので、万葉集の研究の一端を覗かせてくれる好著である。

石激	垂見之上乃	左和良妣乃	毛要出春介	成来鴨	万葉集 巻八 1418 志貴皇子
石ばしる	垂水の上の	さ蕨の	萌えいづる春に	なりにけるかも	
いはばしる	たるみのうへの	さわらびの	もえいづるはるに	なりにけるかも	
岩の上を流れ落ちる滝のほとりのさわらびが、萌え出る春になったことだ。					

この歌は、天智天皇の皇子で、桓武天皇の祖父である志貴皇子の作で、万葉集中の傑作と言われている。初句の「石激」の読みが「いはそそぐ」から「いはばしる」に改変された経緯を丁寧に説明しており、それがまた、たいへん面白いので、興味ある方は、ぜひご一読を。ネタバレになるので詳細は記さないが、そこには、つぎのような原文の誤記があったようである。

「垂見」→「垂水」→「垂氷」

さて、「つきかたぶきぬ」に移ろう。

大谷氏は、この歌の二句「野炎」を「のらにけぶりの」と読み、次のように訳する。

東	野炎	立所見而	反見為者	月西渡	万葉集 巻一 48 柿本人麿
東の	野らにけぶりの	立つ見えて	かへり見すれば	月傾きぬ	
ひむがしの	のらにけぶりの	たつみえて	かへりみすれば	つきかたぶきぬ	
東方の荒れ野に立ちのぼる煙を見て、はっと振りかえり見ると月はすでに傾いている。(大谷訳)					

氏は、この説明に本書の一章を充てて、丁寧に解説する。「炎」は火でも光でもなく、煙と。専門家の説に異議を唱える能力はないが、この改変により、本歌は「万葉集最高傑作の一つ」から全くの凡作(失礼)に転落する。「のら」はなかりう「のら」は。「野良猫」の「野良」ですよ。

①二句が「のにかぎろひの」の場合

48 の「かぎろひ」は朝の燭光。早朝に月が西に傾くのは、旧の 20 日前後。

②二句が「のらにけぶりの」の場合

48「のらのけぶり」つまり野焼きが何時ごろのことか、不明なため、時間の限定は困難。

この歌は、長歌 45 と短歌 46-49 からなる。この 5 歌は、時間の順に並んでいるとされている。

45 荒山道を朝越え、夕方に雪の降る大野で野宿の準備をする。

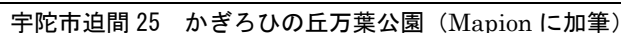
46 昔のことを想うと、寝ることができない。

47 回想（時間情報なし）

48 東の野に夜明けの光（もしくは野焼きの火）が見える。

49 亡き皇子が狩りに出たのは今時分だったなあ。

したがって、「野炎」が朝日であれ野焼きであれ、旧暦 11 月 20 日ごろという推定は成り立つと思われる。いかがであろうか。



大谷雅夫(2021): 万葉集に会う 岩波新書 新赤版 1892